

「むらのでみせの野菜」

当店の野菜を買い求めてくださるお客様方は、どんな理由で買っていかれるのでしょうか。

第1の理由 “安いから”でしょう

それも “無農薬、有機なのに スーパーの野菜より安い。”喜んでくださっている。

第2の理由は “農薬を使っていないから 安全で安心”

第3の理由は “新鮮で とにかくおいしい”

第4は 少数の方々ですが “増田さんの野菜が欲しい”と言って来てくださる。

私たちは、日頃 ほとんどPR宣伝をしていませんので口コミとか、買って食べていただいてリピーターになってくださいます。

この機会に少し私たちの野菜づくりのことを説明してみたいと思います。

(1) 野菜づくりを始めたきっかけ

1999年6月 増田大成(現理事長) 40年間勤務してきたコープこうべを辞めて、食を通して地域の福祉の仕事がしたいと考え、

兵庫県の相生市、赤穂市、上郡町などを拠点に仲間といっしょに有機の野菜づくりを始め、2年後の2001年に特定非営利活動法人

NPOひょうご農業クラブを設立しました。

(2) 20年間、農薬、化学肥料を一度も使ったことがありません。

なぜそうするようになったか。いろんな経緯と理由がありますので、後ほど詳しく説明します。

(3) 直営の野菜畑は、 兵庫県の相生市と宍粟市にあります。

相生市の畑は、若狭野町寺田というところにあります。近くに清流千種川の支流の矢野川がながれています。

小高い山のふもとにあり、水、空気、土のきれいなところです。

宍粟市の畑は一宮町千町にあります。ここは標高700mぐらいの山中で周囲には1000m級の山が5つもある溪谷です。

谷間に小鳥がさえずり、溪流には山女(やまめ)が泳ぎ、河鹿(かじか)が啼いています。

(4)みみず や 微生物が育てる野菜

畑には有機質の肥料がいっぱい入っていますので、みみず や 微生物の菜園でしょう。

畑の野菜は これらの微生物や小動物が育ててくれています。野菜が丈夫で、味がよいのは畑の環境が最良だからだと思います。

(5)畑と私たちの内臓は 微生物でつながっています。

私たちが食べた野菜は身体の中かで内臓にすんでいる無数の微生物が調理して栄養化し、私たちの健康、生命を守ってくれています。

内臓の中かの微生物は有機質の畑の微生物が好きなようです。

畑と私たちの内臓は微生物で仲良くつながっているような気がします。

(6)農薬は 畑の微生物や小動物を殺してしまいます。

化学肥料は、微生物の食べ物にはなりません。

有機質の肥料を入れないと畑の中かから生態系が崩れていきます。

(7)自作、自販なので 安価で提供できます。

自分のところで直接栽培して販売しますと中間的な経費が節約できるので、その分 安く販売できます。

(8)よそから仕入れた商品も売っています。

自作自販だけでは 品揃えに偏りができたり、端境期などに品薄になってお客さまの満足をいただけません。

兵庫県下の農家や直売所などから野菜、果物、米、卵、食品加工品などを仕入れて販売しています。

実態としては、自作自販の商品が優先的に売れています。

[2]特定非営利活動法人 NPOひょうご農業クラブ のご紹介

NPOひょうご農業クラブは 実質的な活動を始めて、今年(平成31年)で20年になりますが、その構想の下敷となったのは、さらに溯れば増田の少年時代の体験が大きく影響していると想像できます。例えば、地域福祉に「食」を中心に考える。

それも有機野菜を自分たちで栽培して使うといった発想は、それなりの体験となんとかなるという自信がないと生まれてこないと

思われます。増田は、昭和20年の小学校(当時は国民学校)3年の秋ごろから田畑の作業の手伝いを始め、中学生のころは

50アールほどの米、野菜の栽培を ほとんど自分でやれるようになっていたといえます。

増田は、1959年3月 中央大学法学部を卒業して、灘生活協同組合(現コープこうべ)に入職し、職員として25年、役員として15年勤務してきました。

1960~1970年代は、戦後の高度経済成長時期にあり、食品業界では粗悪な製造工程から危険な製品が市場に流れ、

多くの人たちを死にいたらしめたり、障害(しょうがい)を残すような惨事が続きました。

森永のヒ素ミルク事件や カネミ油症事件など、食品公害の時代でした。消費者の食品の安全性に対する関心が高まり、

消費者運動、生協設立の気運が盛んになりました。生協は 食の安全性の確保に懸命に取り組んできて食の安全の砦となったのです。日本の有機農業は そんななかから始まっていき、コープこうべも消費者、食べる側から その運動にかかわるようになっていきました。

そんな体験が 有機の野菜づくりに一直線にすすんでいったことに結びついています。

(1) 野菜づくりを始めたころ

1999年6月増田は コープこうべを退職したと同時に野菜づくりを始めました。作業は コープこうべの仲間や友人たち20人ほどですすめましたが全員素人で暗中模索、今から思えばひどいものでした。

①玉葱の苗 20,000本の定植から

、上郡の借りた畑に11月玉葱栽培からとりかかりました。20,000本の玉葱を定植するのにどれほどの面積が必要なのか、

収穫をしたあと、どのくらいの量になって、それを保管する場所はあるのかなど 分からないまま突入するのですから、無謀もいいところのひどさでした。

②「あんたらは 野菜をつくっているのか、草をつくっているのか どっちやねん」

赤穂市高雄の真殿というところで人参やごぼう、里いもなどの苗を定植し、真夏の暑いさなかに草取り作業をしていました。

参加者は 全員の有職者でボランティアですから日曜ごとの作業ですので草が大きく育っています。

近所のおばあさんが 見に来てくれて声をかけてくれます。

「あんたらは 草をつくりまのここまで来とんかいな」と笑いながら言われる始末でした。

③収穫物をどこで売るか？

とれた野菜をどうするか決めないままに種まきや苗植えをしていました。いよいよ収穫をという直前になって、神戸市の六甲アイランドのファッションコート前の広場を借りて週1回の朝市を始めました。

そんなこんなで失敗続き、泥縄式のあけくれでした。

④店がないので宅配販売を開始しました。

六甲アイランドの住民のみなさんを中心に野菜の宅配を数年続けました。

(2) レストランを開店し、店の中や前で野菜を売るようにしました。

①「こどもたちに 無農薬のおいしい野菜を食べさせてやってください」

若いお母さんたちに そう訴えるのですが なかなか聞き入れてもらえませんでした。考えに考えて、こどもとお母さんがいっしょに

野菜を食べる会をレストランで始め、その次に 親子料理教育、こども野菜クラブへと発展させていきました。

その間、5年ほど 土井信子先生に 料理教室を月に一回ボランティアでお願いしました。ご存知の料理家の土井喜晴先生のお母さんです。

お陰さまで、今では大勢の幼児づれのお母さんたちが店に買い物に来てくださるようになりました。

②相生市の旭本町商店街に「よりあいクラブ旭」を開店

商店街の中の1店を借りて、食堂と野菜売り場をつくり、食堂から高齢者向けの給食弁当を配達しました。

15年間続けて平成30年3月31日に閉店しました。

この活動は わずかな有償の全員ボランティアで続けてきました。

給食活動をする第2、第3の事業所を市内の緑丘と古池に開業しましたが、残念ながら平成31年3月31日で終業することになります。

[3]過疎地再生活動に踏みこむ

2009年4月、兵庫県の「限界集落 元気作戦」との縁で、宍粟市一宮町千町との出会いがありました。

1年ほど月1回自治会のみなさんと話しあい続け、2010年4月「あこがれ 千町の会」を立ちあげました。

この会は、千町集落25軒ほどのみなさんと都市生活者30人ほどのボランティア組織です。

限界集落千町の活性化を目的とする活動を むら・まち 力を合せて実行する団体です。

村のなかの休耕、放棄田を再耕し、農薬、化学肥料を使わない野菜栽培から始めました。NPOひょうご農業クラブもその中に加わり

育成した野菜を店で販売していました。

3年間協同活動をしてきましたが、2013年3月特定非営利活動法人青年の村を設立し、さらに専念するようになりました。

あこがれ千町の会は、その後も活動を続け、地域の活性化に貢献しています。

(1) 過疎化の広がりや深刻化

中山間地の人口減少、高齢化の進行は 田畑の休耕、放棄が進み、山林の荒廃など、農業、林業など産業全体に深刻な状況が年を追ってひどくなってきています。ボランティア活動の取り組みは、点の効果はあるものの、線にはつながらず、面にはおよびにくい状況です。

その限界を打破するには、過疎再生を事業として真正面からとらえないとできないと判断し、そのための組織体として特定非営利青年の村を設立しました。

(2) 過疎化の方策

①中山間地の農林業の活性化

1. 中山間地を豊かにすること
2. 中山間地に若者の働く場、生活できる収入の確保
3. 特色のある農作物の栽培—有機農作物の生産が一番良いと思います。

②農業の企業化

農業の生産性を高め、収量、収入を増やすには効率のよい生産方式を取り入れる必要があります。

これには異論が多くあります。問題点で大きいのは、稲作で必須条件の水の使用についてです。集落ごとに水を確保している日本の 協同水利方式との調整が難問です。

現在の生産様式は、個人営業、集落営業、企業的経営の3方式が混在し、将来どうなっていくのか、これからも試行錯誤が続いて

いくと考えられます。

③農業国際化に対応できる過疎化対策が必要です。

TPPをはじめ、農業の将来は1国だけの都合だけでは考えられません。国際的な競争場裡のなかで勝ち残り、生きぬいていく農業、農村を作っていく必要があります。その条件は次のようにとらえることが大事です。

1. 産物の品質が極上であること。輸出産品として通用すること。
2. 生産コストを下げ、価格競争に耐えられること。
3. 農村の自然、文化、生活環境が優に、国際的な交流の場として収入の途があること。

(3) 加西市での「夢農業公園」の挫折

2018年から2020年までの3年間、株式会社フジタ道路と共同で合同会社夢農業公園を設立し、過疎地再生のビジネスモデルケースづくりにチャレンジしてきたが 2020年9月に中止、終業しました。その原因、理由は 次のような事情です。

①大規模農業の経営を担う経営資源が蓄えられていませんでした。

人材、資金、ノウハウ、生産設備、資材など不十分なままでのスタートでした。

②農場が 農地として肥やされていませんでした。

元々は農地だったのですが耕作を放棄してから数年がたった原野化したところでした。有機質の畑に復元させるには3～5年が必要です。それだけの時間を待つ余裕がなかったのです。

③事業の共同化には 事業についての理解と相互信頼が必要です。

その関係をつくりあげる準備ができていないままでした。

④事業全般に対する認識が不十分でした。

失われた3年は 大きな損失でしたが、またとない学習をしました。

[4]大転換の出直し改革

(1)状況の変化認識

10年前、過疎地に足を踏み込んだところ、限界集落は、その集落の人びとと外からの応援があれば、なんとか立ち直ると みんな考えていました。しかし、あれから10年、人口減は激しくとどまることはない認識せざるえなくなっています。

①否定認識から肯定認識へ

1. 人口減を 人口増に転換させようとする認識
2. 人口減は 止められないという現状肯定認識

10年間 1の認識のうえにたつてあれこれ対策を考えてきたが、それが無理だと明白に分かった以上、2の認識にたつて対応策を考えざるをえない。

加えて最近顕著になりかけてきたことがあります。

それは、都市部のなかに高齢化と人口減が進行し、中山間地の過疎化現象と同じような問題がでてきている地域が増加し ています。

②現状肯定認識をどう理解したらよいのでしょうか。

1. 人口が減少したら、1人当たりの空間面積が広がります。
2. 耕作放棄地が増えたら、耕作地再生可能面積が大きくなり、利用用途も変えやすくなります。
稲作、野菜栽培から果樹園、畜産等に利用転換が可能になります。

3. 空き地の広がりは公園化も可能です。

(2) 中山間地の利用価値の転換

弥生以来、農村は食料、材木等の産物の生産地としてとらえられてきました。しかし、農村に広がる田畑、山林、河川などの空間は、人間の自然回帰、人間と自然の接触調和に偏重が大きくなり、人間性や人間発達の面で障害が出てきています。

この文明的な異常現象をただすために、自然と人間の接触面積を拡大する必要があります。

中山間地を自然公園化して、空間利用の価値転換をはかることを考えてはいかがでしょうか。

これは農村の大改革で弥生以来の変化をもたらします。

この大転換は 人類史上初めてのことになるかもしてません。

世界中の人たちが日本を訪れ、インバウンドは農村に向くことになるでしょう。日本改造100年計画、手始めに大阪万博を機 に兵庫の地から挑戦してみたいかがでしょうか。

(3) 格差、偏重のない豊かさ、自然と人間の調和のとれた農村づくりをめざすことが、試行錯誤10年間の過疎再生活動の到達点です。

この結論を目標に、これから実現可能な具体的計画を練り上げ実行していきます。